

データベースの有効性 ―編集者としての視点―

私のような史料を編集する立場の者が、ジャパンナレッジ版は非常に便利だなと思う点があります。

少し専門的な話になりますが、古文書に名前をつけるときに、たとえば「下知状（げちじょう）」とか「下文（くだしぶみ）」とかの呼称がいろいろあって、同じような機能を持った文書でも時代によって呼び方が違うこともあり、どう名付けるか判断に迷うケースがあります。そこで、その呼び方がどこで変わるのかということを検索して、その傾向が分かると、とても便利に役に立つのです。

それから、これは「こだわり」になってしまいますが、文書にサイン（花押）が据えられていたり署名があったり、封をしてあったりというのがありますが、これを史料集の版面でどのように表現するかということはいろいろな作法があり、実は編集・校訂をしている時に非常に悩ましいものです。

そこでジャパンナレッジを検索すると、結果が一覧データとして出てくるので「この編者はこういうふうに行っているんだな。じゃあ自分はこうしよう」とか「この時代のこの種の文書はだいたいこのあたりに花押を配置するのが一般的だ」といったように、版面をデザインする上で重要な参考資料になるのです。

デザインというのは決して無意味なものではなくて必ず意味を持っています。古文書では、たとえばサインの位置には重要な意味があります。それを本の形で活字にした時に、的確に伝えるためにはどのように配置すればよいかということ、先人たちが作ってくれた何百冊分ものデータを簡単に比較しながら検討できるということは、私たち編者・校訂者にとっては大きな意味があり、ありがたいのです。

データベースは、利用者もしくはその利用者と資料とをつなぐ図書館員の方々に大きなメリットをもたらすというだけではなく、私たちのような編集者にとっても大きな意義があるということをお伝えしておきたいと思います。

“閃き” は紙の本から

とはいえ紙の書籍が持つ有効性というのは、なくなると私は考えています。というのは、やはり閲覧をする上での便利さです。たとえば3ページ目を見ていて50ページ目を同時に見るといった、複数ページを比較しながら読んでゆく場合の閲覧性・一覧性といった部分は、やはり紙の本が優位で、まだデジタルには置き換わらないだろうと感じています。

それからセレンディピティ効果という、自分が探している文脈とは違うものを偶然目にしたときに、そこから閃きを得たり新しい研究につながっていったりということが、文系理系にかかわらずあるそうです。

データベースというのは大概目的を絞って検索するもので、期待する結果を求めて、それにふさわしい検索語句を入れ試してゆくものです。他方、なんとなく見ていたら閃くという体験は、私たちの五感を通じた刺激に拠るものですから、デジタルではなかなか超えられないだろうと思っています。

私たちは、本を持ち紙面を見る、そしてデータを見するという二つの作業を繰り返しながら知識や知恵を深めていくことが、今、求められているのだろうと感じています。

将来の展望を含めいろいろなお話をさせていただきましたが、皆さんには少しでもジャパンナレッジを使っていただいて、その有用性というものをご自身で確認していただけたらなと思っております。

ジャパンナレッジ版 史料纂集・群書類従 お役立ちコンテンツ

活用のヒントを紹介！

JK版史料纂集・群書類従をさらに活用するために役立つコンテンツを八木書店公式HPで公開しています。



八木書店 HP

Pick Up !

『ジャパンナレッジ版 史料纂集』で意外な発見！大学院生によるHow to 文献調査。研究への活用方法を詳しく紹介しています。



紀伊國屋書店 HP

このリーフレットは、2025年11月11日に図書館総合展で開催された、JKBooks「Web版 史料纂集 第4期」2026年リリース記念トークイベント「『ジャパンナレッジ版 史料纂集・群書類従』が拓く史料学 ―紙とデジタルの交差点―」の内容の一部編集・抜粋して掲載したものです。



JK版史料纂集 第4期 古文書編の詳細はこちら



八木書店出版物目録



『ジャパンナレッジ版 史料纂集・群書類従』が拓く史料学 ―紙とデジタルの交差点―

『史料纂集』校訂者が語る



東京大学史料編纂所と『群書類従』・『史料纂集』

最初に、自己紹介を兼ねまして、私が所属している組織である東大史料編纂所のご紹介と、『群書類従』『史料纂集』との関わりをお話しさせていただこうと思います。

史料編纂所という組織は、1900年から現在まで125年間にわたって、『大日本史料』『大日本古文書』『大日本古記録』など、古代から明治維新までの史料集を1200冊ぐらい刊行している機関です。

現在、私のような史料集編集を担当するメンバーが50名ほどおりまして、先ほど示したようないろいろな史料集を作っています。また多くの所員は地方自治体史ほか様々な場においても史料集の編集に当たっています。

私は八木書店から刊行されている『史料纂集』にも携わらせていただいて、2026年1月配信の『ジャパンナレッジ版 史料纂集 第4期 古文書編』に収録されている『安保文書（あほもんじょ）』の校訂に参加させていただきました。

『史料纂集』『群書類従』などを本という形で出版するとともに、今、ジャパンナレッジというプラットフォームに、デジタルデータも展開することでハイブリッドなサービスを提供しているわけですが、実は史料編纂所も同じような事業を進めております。特にここ10年、15年ぐらいは、史料集を作ることと同時に、関連データベースを多数作っていくということで、社会的に活動しています。

そういった意味では、現在、新しい歴史研究の局面が非常に広がっているといっているのではないかと考えています。



井上 聡 (いのうえ さとし)

東京大学史料編纂所附属史料学協創センター准教授。専門は日本中世史。『日本荘園絵図聚影』『大日本古記録』の編集に従事するほか、「電子くずし字字典データベース」「花押データベース」などの開発・運営に参加。現在、2025年度新設の同センターにて、史料原本の修理・調査を通じて蓄積された知見・経験値を、デジタル情報技術と融合させることで可視化・共有化してゆく事業を進めている。『安保文書』（史料纂集古文書編）校訂者。

こうした学問の進化・発展というものに合わせまして、ちょうど今年度（2025年度）から史料編纂所内に史料学協創センターというものを設置しました。

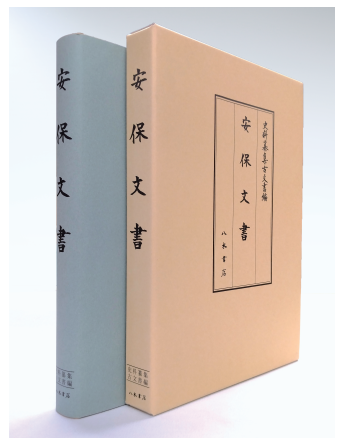
ここで何をしているのかと申しますと、これまで100年以上にわたって進めてきた史料集編集の経験知や、デジタル技術を活用した様々なデータベースなどの情報発信、加えて最近目まぐるしく進展している文化財保存科学——いわゆる“もの”の分析、こういったものを統合することで何か新しい史料学を提唱できないかということを考えています。

そういった観点から、『ジャパンナレッジ版 群書類従・史料纂集』を私のような史料を編集する立場からみるとどうかということ、お話をしていきたいと思っています。

『史料纂集古記録編 安保文書』

私が校訂・編集に参加したのは『安保文書』という文書です。安保氏というのは埼玉県の北部、旧国名ですと武蔵国（むさしのくに）の北部に展開した比較的有力な武士団です。平安時代の終わりぐらいから戦国時代までという長い期間にわたって武蔵国の北部で活躍した一族でした。そして、この一族の関係者のものと、現在80点ほどの中世文書が伝来し、さらに関係する系図類や様々な文書というのが複数あって、それらをまとめて収録したのが『安保文書』ということになります。

これは大変使い勝手がよいもので、文書についての様々な解説・



史料纂集古文書編 安保文書



八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 ●Web <https://catalogue.books-yagi.co.jp/>
●TEL 03-3291-2961 [営業] -2969 [編集] ●FAX 03-3291-6300 ●E-mail pub@books-yagi.co.jp

解題もありますし、もちろん古文書の本文もすべて読むことができます。この一冊を読み解けば、鎌倉時代から戦国時代の安保氏の動向というのが非常によく分かる構成になっています。

さて、これが『ジャパンナレッジ版』で配信されるとうどういったメリットがあるかという、まず安保の一族がどういう経緯でいかなる一族と婚姻関係を結び、どのように勢力を広げていったのかを知ることができます。実は、そういうことは残念ながら古文書だけではなかなか分かりません。古文書の多くは手紙のやり取りですので、それ以外の史料に記される要素はなかなか拾えないのです。しかしジャパンナレッジで検索をかけて、ある人物がどこに載っているのかということを追求していくと、その人物の手がかりが意外なところで発見されるのです。

古文書からの広がり ―『安保文書』を例に―

『群書類従』には様々な歴史の編纂物がたくさん収められていますが、そういったところにも安保氏の活躍が見られます。古文書という枠を超えて、いろいろな史料が串刺しで見えてくるということが、『ジャパンナレッジ版』で配信されることの大きな意義なのだろうと思います。

さて、「安保」というキーワードで『史料纂集 古記録編』と『群書類従』を検索してみると、191 件出てきます。古文書に見えない世界であり、これが見えてくるとというのが歴史研究をする上で大きな武器になるということは、言わずもがなというところです。

もちろん『安保文書』だけでも魅力的な文書がたくさんあって、読み解いていくことの楽しさがありますが、たとえば『安保文書』に出てくる人物を『群書類従』の系譜部・系図部で調べていくと、安保氏というのが武蔵七党という大きな武士団の中の一つのブランチであることが分かります。また、武蔵七党の系図をみていくと安保氏の関係者がたくさん分かってきます。

安保氏は鎌倉北条氏とも密接な関係を持っていたので、北条氏の系図の中にも安保氏が出てきます。そういうことをみていくと、安保氏は実は鎌倉幕府の中で非常に大きな力を持っていたのだろうということが分かってきます。

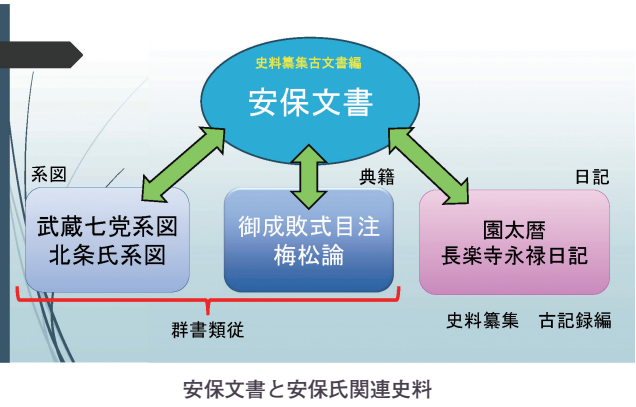
それから、安保氏は室町時代になると、鎌倉府の奉行としても活動してゆきます。そのため法律を解説した書目、たとえば『群書類従』の中にある「御成敗式目注」などにも安保氏は登場します。

今までですと、こういう作業は紙の書籍を一生懸命

めくって探すということだったわけですが、現在は『ジャパンナレッジ版』で検索をかけるとパッと出てくることになります。

古記録でも同様です。『史料纂集』に収録されている南北朝時代の日記『園太暦』には安保氏が登場し、彼らが京都でも活躍していることが分かります。また戦国時代の『長楽寺永禄日記』にもその姿をみることができます。長楽寺は上州、今の群馬県ですから、安保氏の本拠地である埼玉県からは近いのですが、様々な場所で安保氏が広く活動していたことを、確認することができるのです。検索をかけるだけで、様々な可能性を含んだ事例が数多く提示されることで、「あ、これはもしかして関係があるのでは」と気付けることがものすごい大きな力になってくるのです。

歴史を専門にずっと勉強されている方でも、系図や典籍、古記録など種類が違う史料をあまねく見て知っているという人はなかなかいません。けれども現在のツールをしっかりと使いこなせれば、常軌を逸した記憶力を持っている方に肩を並べることができる。改めてすごい時代になったと思っています。



『ジャパンナレッジ版』にはこのような大きなメリット・魅力があるということを、まずは皆さんに知っていただきたいと思います。

デジタルアーカイブの普及のなかで

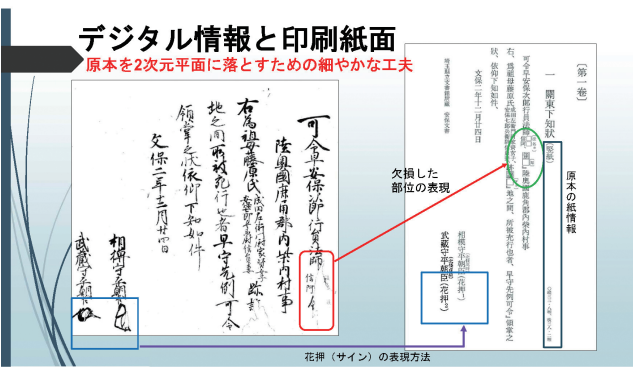
ここから先は、私が史料を編纂するという立場にも立っているということで、お話を進めたいと思います。現在、デジタルアーカイブというものが様々な機関で発展しております。史料編纂所もそうですし、国会図書館や国立公文書館、国立歴史民俗博物館など、様々なところから古文書もしくは古記録の原本を画像で見ることができます。

ただ、いろいろな技術が発展してくる中で、これまで私たちが触れてきた紙の書籍が、実は非常に有効で、よくできているものだということを、強く意識するようになりました。紙の書籍というのは版面（＝紙面）、

つまり二次元の平面で、クリックしてもどこかへ飛んでいかない。紙をめくるしかないという、限られた構造になります。そうであるがゆえに、この平面にいかに関情報を配置するかという工夫が、百何十年という経験のもとに育まれてきました。こうした事実がデジタル情報の発展によってかえって浮び上がってきているのではないかとと思っています。まだまだ本は死んでいないと思うところです。

紙面に施された細やかな工夫

例として、史料編纂所から公開されている安保文書の影写本（原本を人の手で書き写したもの）の画像（※下掲左図）をお見せします。



これは鎌倉時代に幕府が出した命令書です。これをジャパンナレッジのフルテキストデータで閲覧すると、任意の文字検索ができますし、文書を時代順に並べられるといったメリットもあり、リンクを介して様々な世界へとつながっていくことができます。その一方で、デジタル情報にはまだ上手く盛り込むことができない、あるいは盛り込むと煩雑で、逆に伝えるにくくなってしまうという部分が存在しています。

影写本の画像の右側に、『史料纂集古文書編 安保文書』の同じ文書を取めた版面を示しています。ここには、原史料の情報、堅紙（たてがみ）という形式とか、大きさはどれぐらいとかいった情報が示されています。それから一行目が少し虫食いで壊れていますが、こういったところをどう表現するかという工夫がなされています。たとえば、虫食いの場合は四角形を入れて、おそらく実際にはこういう文字だったのではないかとという推定を右側に示す、などというルールをいろいろ決めているのです。

また、文書の最後にサインがあります。鎌倉幕府の執権という、権力者が書いた「花押」というものになりますが、これも本にするときは画像で入れようとすると手間がかかります。それではどうするのかというと、「(花押)」と示した後に番号を振って、巻末に収

録した花押一覧と比べられるようにしています。

このような配置などのきめ細やかな工夫は、もちろんデジタルにも組み込める部分は多いけれども、いろいろ煩雑になってしまい、パッと見て直感的には分かりにくくなってしまうというのが現状です。こういった部分で、紙面というのはまだまだ有効であるということになるのかなと思います。加えて、編者・校訂者はいろいろな知識や情報を版面の中に入れていきます。たとえば、文書というのは当時からしばしば写しが作られるものなのですが、その文書が原本なのか写しなのかといったような判断も、活字にすると見た目では分からないので注記を入れてゆきます。それから、古文書の中に少し違う墨色の文字が混じっているというケースがあります。それがその文書を書いた本人の筆なのか、それとも後から別の誰かが書き入れた別筆なのか、そういった判断も注記されているのです。

ジャパンナレッジの画面では、デジタルデータの有効性だけに注目するのではなくて、版面とともにセットで見ていくということが、実は非常に重要なポイントになります。たとえば左側に史料纂集の『勘仲記』という日記の版面が、右側にテキストデータが表示されています。このように両方を一緒に見られる、すなわちデジタル情報で補いきれないものを左側の版面で見確認できるということ、このハイブリッドさがジャパンナレッジ版の強いポイントではないかと考えています。両方のいいところをしっかりと使っていただけると、私も校訂者としてとても嬉しく感じます。



『勘仲記』第五卷 弘安九年閏十二月十七日条
ジャパンナレッジ Lib より